



Title	Sense of Coherenceと自発的自己観及び自発的世界観との関係
Author(s)	磯和, 壮太郎; 野口, 直樹; 三宮, 真智子
Citation	大阪大学教育学年報. 2019, 24, p. 29-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71373
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Sense of Coherenceと自発的自己観及び 自発的世界観との関係

磯 和 壮太郎 野 口 直 樹 三 宮 真 智子

【要旨】

本研究は、大学生を対象とした20答法の分析から、自発的自己観・自発的世界観がSense of Coherence (SOC) に与える影響を探索的に検討し、SOC涵養のための知見を得ることを目的とした。結果として、自発的自己観からは、「肯定的表現（～だから好き、良い）」を用いた好ましさの高い記述がSOCに対して正の効果を、「否定的表現（～だから嫌い、ダメ）」を用いた好ましさの低い記述がSOCに対して負の効果を示した。自発的世界観からは、「主観的特徴（大きい、狭い、広い、丸い）」がSOC全体と「把握可能感」に対して正の効果を、「戦争・平和（戦争がある、平和だ）」に関する好ましさの低い記述が、SOC全体、処理可能感、「有意味感」に正の効果を示した。また、自発的世界観の好ましさとSOCの相関関係を検討したところ、正の相関関係にあることが示された。さらに、SOCに対する自発的自己観と自発的世界観の交互作用を検討したところ、自発的自己観が好ましくなく、自発的世界観が好ましくない者のSOCが最も低くなった。加えて、自発的自己観が好ましく、自発的世界観が好ましくない者のSOCが最も高かった。これらの結果から、SOCに涵養に向けたアプローチについて議論した。

1. 問題と目的

同じようなストレス状況下にあっても、精神的に健康でいられる者とそうでない者がいる。これらに分ける要因（志向性）のひとつとして挙げられる概念に、Sense of Coherence (SOC) がある。

SOCはストレス対処・健康保持能力とされており、「その人に浸みわたった、ダイナミックではあるが持続する確信の感覚によって表現される世界〔生活世界〕規模の志向性」(Antonovsky 訳書 2001, 21頁)と定義される。SOCは「把握可能感」・「処理可能感」・「有意味感」の3因子から成るとされ、それぞれ「自分の内外で生じる環境刺激は、秩序づけられた、予測と説明が可能であるという確信」(「把握可能感」)、「その刺激がもたらす要求に対応するための資源はいつでも得られるという確信」(「処理可能感」)、「そうした要求は挑戦であり、心身を投入しかかわるに値するという確信」(「有意味感」)と定義される(Antonovsky 訳書 2001, 21頁)。要約すれば、SOCとは、「自分が生きている世界は予測と説明、把握が可能であること、自分に起こってくる事柄には、自力に頼るだけではなく他者の力を借りるなどしつづなんとかが対処していけること、また、そうして自分に起こってくる事柄には取り組む価値があり自分にとって意味があることを、常に意識するわけではないものの確信を持って感じていること」(磯和・野口・三宮 印刷中)である。

SOCは、多くの研究で心身の健康やウェルビーイングとの正の関係が示されている(戸ヶ里 2008)。またSOCに関する論文をレビューしたEriksson & Lindströmの研究では、SOCの精神的健康に対する効果が明らかであること(Eriksson & Lindström 2006)や、老若男女、病の有無を問わず、SOCとQuality of Life (QOL)は正の関係にあること(Eriksson & Lindström 2007)が示されており、SOCは人々が高いQOLを保ちつつ、

健康に生きていくために涵養されるべきものと考えられる。

SOCは、ストレスラーによる緊張の発生時に汎抵抗資源（generalized resistance resources：GRRs、特定の汎抵抗資源を示す場合はGRRと表記される）を動員して緊張に対処するための力となると考えられており、発生した緊張に対する評価を行う際に参照される（Antonovsky 訳書 2001, vi頁）。GRRsとは、その人が持つあらゆる内的・外的な対処資源の総称である。Idan, Eriksson, & AI-Yagon（2017）は、GRRsを12の要因に整理しており、その中には自我アイデンティティやソーシャルサポート、社会との関係や文化的安定性、宗教・哲学・芸術や個人の心の状態といったものが含まれている。個人が持つ自己観や世界観も、GRRとしてIdan et al.（2017）の示すGRRsの分類の中に散在していると考えられる。SOCと自己観との関係については、磯和（印刷中）で整理されており、SOCと自己観は相互に影響を及ぼしあうものの、基本的にはSOCが自己観よりも先行する要因であるとされている。SOCは定義的に「(生活)世界規模の志向性」を問題とすることから、個人の持つ自己観のみでなく、世界観の好ましさをまたSOCと関連していると考えられるが、SOCと世界観との関係を検討課題とした研究は、筆者らが調べた範囲では見られない。SOCと世界観との関係については、自己観と同様SOCと世界観は相互に影響を及ぼしあうものの、基本的にはSOCが世界観よりも先行する要因であると考えられる。

自己観や世界観がGRRとしてSOCによって動員されるためには、ある程度自力でアクセスできる自己観や世界観であることが必要であると考えられる。他者に指摘されて気づくといったような、自力でのアクセスが困難な自己観や世界観の場合、緊張評価の際にアクセスされるとは考え難いためである。自力でアクセス可能な自己観や世界観を扱う場合、心理尺度を用いることは不適切である可能性がある。心理尺度に回答を求める場合、自力でアクセス可能な自己観や世界観であったのか、それとも尺度項目に触発されアクセス可能となった自己観や世界観であったのかの区別が困難となるためである。McGuire, McGuire, & Winton（1979）では、調査者があらかじめ用意した項目に回答させることで得られる反応的自己観（Reactive self-concept）と、個人にとって重要な側面を自ら表現させることで得られる自発的自己観（Spontaneous self-concept）とを区別している。自発的自己観を測定するための代表的な方法として、20答法（Kuhn & Mcpartland, 1954）があるとされる。先行研究では、20答法を用いて自己観とアタッチメントスタイルとの関係を検討した田附（2015）がある。

20答法には様々なバリエーションがあるが、概ね「私は……」で始まる20の文を作成する方法であり、これによって個人の関心や特に注目している自己概念の領域、個人が自ら持っていると認知している特性や、そのことへの評価や態度などを得ることができる（田辺・正保, 1997）。本研究では、このバリエーションとして、「私は……」の部分で「世界は……」に置き換えることにより、個人の保有している世界観にも焦点を当てることを試みる。

田附（2015）では、20答法をテキストマイニングを用いて分析することにより、各アタッチメントスタイルが持つ自己観の構成要素や構造を探索的に検討することを試みている。本研究においても、20答法を用いることで、SOCと自発的自己観や自発的世界観の構成要素を探索的に検討することができると思われる。山崎（2008）や戸ヶ里（2014）、藤里（2015）は、SOC研究の課題として、SOCを促進する介入方法を検討することの重要性を指摘しているが、SOCと自発的自己観、自発的世界観との関係を検討することは、教育的介入の目標を明確にすることに繋がり、介入研究の一助となると考えられる。

また、自発的自己観や自発的世界観がGRRとして機能し、緊張や緊張によって生じるストレスに対処するために用いられる場合には、自発的自己観と自発的世界観が本人にとって好ましいことが重要であると考えられる。すなわち、自発的自己観の好ましさを、自発的世界観の好ましさとSOCとの間には正の相関がある

と考えられる。自発的自己観の好ましさとSOCとの相関関係については、磯和他（印刷中）において検討され、両者には正の相関関係があることが確認されている。しかし、磯和他（印刷中）では自発的世界観については検討されておらず、自発的世界観の好ましさとSOCとの関係は明らかではない。また、SOCの特徴として、自尊心や自己効力感のような、世界と対峙する自己を想定する文化の価値観に依拠していないこと、世界と対峙する自己ではなく、自分を取り巻く生活世界を信頼している自己を想定する点が挙げられる（山崎 2011, 8 頁）。世界と対峙する自己か、世界を信頼している自己か、という点に関しては、本人のもつ自発的自己観の好ましさと自発的世界観の好ましきの組み合わせによって検討可能であると考えられる。世界と対峙する自己や世界を信頼している自己が、SOCの程度と関わるのであれば、SOCに対する自発的自己観の好ましさと自発的世界観の好ましきの間には交互作用が存在している可能性がある。この点を検討することで、高いSOCを有するものは世界を信頼している自己を有している、すなわち、世界と対峙する自己を想定する文化の価値観に依拠していないという仮説の検証が可能であると考えられる。

自発的自己観が好ましいことと自発的世界観が好ましいことは、それぞれSOCに対して正の効果を有すると考えられるが、高いSOCを有するには、自発的自己観と自発的世界観のいずれもが好ましいことが必要であると考えられる。この場合、自発的自己観と自発的世界観の両方がGRRとして機能することが想定される。また、自発的自己観が好ましく、自発的世界観が好ましくない場合、自己と世界は対立している状態であり、自発的自己観はGRRたりうるが、自発的世界観は対処すべき対象、すなわちストレスラーとして機能する可能性が想定される。逆に、自発的自己観が好ましくなく、自発的世界観が好ましい場合、自発的世界観はGRRたりうるが、最も身近な自発的自己観自身がストレスラーとして機能する可能性が想定される。これら3つの場合は、自己観と自己を取り巻く世界観の少なくともいずれかはGRRとなる。しかしながら、自発的自己観と自発的世界観のいずれもが好ましくない場合は、自己観と自己観を取り巻く世界のいずれもがGRRたりえず、自己観も世界観もストレスラーとなることが想定される。すなわち、自発的自己観と自発的世界観のいずれもが好ましくない場合、常にストレスラーと共にあり、ストレスにさらされている状態であると考えられる。これらのことから、自発的自己観の好ましさと自発的世界観の好ましきの交互作用は、両方が好ましい者のSOCが最も高くなると考えられる。また、いずれか一方が好ましく、いずれか一方が好ましくない者のSOCは中程度に止まるが、より身近な自己観がGRRとなる自発的自己観が好ましい者が、比較的高いSOCを有するだろう。一方で、両方が好ましくない場合、常にストレスにさらされている状態と考えられ、SOCは特別に低くなると考えられる。

20答法によって自発的自己観・自発的世界観を検討する場合、生成された文章（以下、反応とする）がその人にとって好ましいものであるか否かは、分析者が判断することは難しい。分析者に可能なのは、客観的に見て好ましいかどうかの判断であり、その本人にとって好ましいかどうかは判断できない。そこで本研究では、調査協力者の20答法の反応について、自らによる評定を求め、その人にとっての好ましさを問題としたい。これによって、20答法で表出された自発的自己観、自発的世界観の諸側面が総体として回答者にとって好ましいものか好ましくないものかのどちらかに偏っているかを量的な指標として表すことができると考えられる。20答法によって表出された自発的自己観の好ましき、自発的世界観の好ましきの総体を量的指標によって捉えることができれば、他の心理尺度とともに量的解析にかけることが可能になる。

本研究の目的は、20答法の反応を分析し、SOCに影響を与える自発的自己観・自発的世界観について探索することにより、SOC涵養のための知見が得られないかを検討することである。加えて、自発的世界観とSOCの関係を検討することによって、SOCの概念仮説の検証を行うことである。仮説1は「自発的自己観の好ましきと同様、自発的世界観の好ましきとSOCの間には正の相関がある」、仮説2は「自発的自己観の好

ましさと自発的世界観の好みしきはSOCに対して交互作用を有しており、自発的自己観と自発的世界観の両方が好ましくない者のSOCが最も低くなる」である。

2. 方法

(1) 調査手続と分析対象者

地方私立A外国語大学において、教養教育科目の心理学の授業を受講していた学生を対象とした。本調査は2回に分けて実施した。1回目は心理尺度のみの調査を実施し、2回目に20答法のみの調査を実施した。調査時期は2016年1月初頭～中旬であり、調査は質問紙を用いて一斉に行われた。口頭とフェイスシートにて調査目的を説明した後、フェイスシートに記載された同意非同意のチェックボックスを用いて調査協力への同意を取った。回答にかかる時間は、調査1は15分、調査2は20分程度であった。調査1では183名、調査2では167名から質問紙を回収した。このうち、調査に同意しなかった者（のべ6名）、2時点の対応が取れなかった者、後述する回答を放棄した者（自己：23名、世界：40名）と欠損値が含まれていた者を除外した結果、自発的自己観に関する有効回答者数は93名（男性25名、女性68名、平均年齢20.74歳、 $SD=0.81$ 、年齢不詳者1名）、自発的世界観に関する有効回答者数は82名（男性24名、女性58名、平均年齢20.79歳、 $SD=0.81$ 、年齢不詳者1名）、自発的自己観と自発的世界観の両方に関する有効回答者数は80名（男性23名、女性57名、平均年齢20.80歳、 $SD=0.82$ 、年齢不詳者1名）となった。以後、自発的自己観に関する分析には93件のデータを、自発的世界観に関する分析には82件のデータを用いる。自発的自己観と自発的世界観を同時に分析に用いる場合は80件のデータを用いる。

なお、本調査は大阪大学人間科学研究科教育学系の倫理審査（受付番号：15058）を受けている。

(2) 調査1の内容：心理尺度による調査

基本情報 調査への同意について、フェイスシートにてチェックボックス形式で回答を求めた。その後、年齢・性別・学部・学年について回答を求めた。また、2時点での対応を取るために、「学籍番号」か、「誕生日と携帯番号の下4桁」のいずれか一方に回答を求めた。

SOC 日本版人生の志向性に関する質問票（Antonovsky 訳書 2001）のうち、短縮版での使用が推奨されている13項目（SOC-13）を7件法で使用した。この尺度は、Eriksson & Lindström（2005）のレビューによって十分な信頼性と妥当性があるとされた尺度である。また、3下位尺度の α 係数は低いものの、2次因子分析を用いた複数の研究で信頼性が確認され、3下位尺度に分けても使用に耐えるとされている（戸ヶ里 2017, 206頁）。「把握可能感」の項目例として、「あなたは、気持ちや考えが非常に混乱することがありますか？」について、「1.とてもよくある」から「7.まったくない」までで答える項目がある。「処理可能感」の項目例として、「あなたは、自制心を保つ自信がなくなることがありますか？」について、「1.とてもよくある」から「7.まったくない」までで答える項目がある。「有意味感」の項目例として、「あなたが毎日していることは、」について、「1.喜びと満足を与えてくれる」から「7.つらく退屈である」までで答える項目がある（逆転項目）。

なお、調査には上記以外の項目及び自由記述欄も含まれていたが、本研究では検討課題ではないため、分析には使用していない。

(3) 調査2の内容：20答法による調査

基本情報 調査への同意について、フェイスシートにてチェックボックス形式で回答を求めた。その後、年齢・性別と、2時点での対応を取るために、「学籍番号」か、「誕生日及び携帯番号の下4桁」のいずれか一方に回答を求めた。

自発的自己観 Kuhn & Mcpartland (1954) によって開発された20答法を改変して用いた（自己に関する20答法）。田附 (2015) を参考に、「“自分のこと” というこで、あなたの頭に思い浮かんできたことを、“私は……” に続けるようにして、20項目以内で書いてください。どういうことを書いたらよいか、いけないとかいうことはありませんので、思いつくままに自由に書いてください（5分間）。」と教示した。20答法への回答後、調査協力者が自ら生成した“私は……”に続く文章の右横に配置された、「非常に好ましくない～非常に好ましい」までの5件法の回答欄に回答を求め、この尺度の平均値を自発的自己観の好ましき得点とした。回答は、あくまで自分にとって好ましいかどうかを基準とするよう求めた。

自発的世界観 自己に関する20答法のうち、“私は……”に関する部分を“世界は……”に置き換えて回答を求めた（世界に関する20答法）。教示文中の“自分のこと”は、“自分の生活している世界のこと”に置き換えた。自発的自己観と同じく、生成された項目評定の平均値を自発的世界観の好ましき得点とした。

回答チェック項目 20答法は、20の項目を埋めて回答を終了しない場合、回答を放棄したのか、回答数までしか文章を生成できなかったのかの区別ができないため、確認する項目を設けた。自己に関する20答法・世界に関する20答法のそれぞれについて、「できうる範囲で回答した」か「放棄・中断した」かのチェック欄に回答を求め、「放棄・中断した」ものは分析から除外した。

なお、調査には上記以外の項目及び自由記述欄も含まれていたが、本研究では検討課題ではないため、分析には使用していない。

3. 結果

(1) 各変数の基礎統計量及び信頼性と妥当性の検証

使用した尺度と各20答法について、自発的自己観と自発的世界観の両方が揃っているデータ（80件）の基礎統計量を算出した⁽¹⁾（表1）。その結果、SOCの総得点は、戸ヶ里・山崎・中山・横山・米倉・竹内（2015）に示された25歳～30歳の日本におけるSOC-13・7件法の基準値（ $M=4.21$, $SD=0.9$ ）を下回る値を示した。SOCは年齢とともに上昇する傾向がある（戸ヶ里他 2015）が、それを見込んだとしても若干低い値であるように思われた。自発的自己観のデータ（93件）における、自己に関する20答法の反応数は1,269個、平均13.80個（ $SD=5.11$ ）と、田附（2015）の6.74個（ $SD=5.62$ ）よりもかなり多く見受けられるが、江見・山田（1986）では大学生群は11.73個（ $SD=5.42$ ）の反応数であることから、本結果は一般の大学生の回答数よりもやや多い程度と見受けられた。一方、自発的世界観のデータ（82件）における世界観に関する20答法の反応数は764個、平均9.28個（ $SD=5.16$ ）と、ほぼ同一の調査対象者が回答しているにもかかわらず比較的小さな値を示した。

自発的自己観と自発的世界観の両方が揃っているデータ（80件）におけるSOC尺度の α 係数については、SOC尺度全体では $\alpha=.73$ と許容可能な値を示したが、SOCの下位尺度については $\alpha=.34\sim.58$ と看過できない値を示した。戸ヶ里（2017）によると、3下位尺度に分けた場合でも使用に耐えるとされているため、本研究では下位尺度別の結果も検討した。

自発的自己観と自発的世界観の両方が揃っているデータ（80件）に対して、自発的自己観・自発的世界観

とも、20答法の反応数と反応に対する好ましさの評定値とSOCの相関係数を算出した。その結果、自発的
自己観・自発的世界観とも、反応数とSOC総得点との間に相関が見られなかった。一方、SOC総得点と自発的
自己観の好ましさ、自発的世界観の好ましさのそれぞれについては、有意な正の相関が見出され、仮説1は
支持された（自発的自己観： $r=.38$, $p<.01$ ；自発的世界観： $r=.31$, $p<.01$ ）。

表1 SOC尺度と自己に対する20答法・世界に関する20答法の基礎統計量と相関係数（ $N=80$ ）

	基礎統計量				相関係数							
	Mean	SD	a	Range	a	a-1	a-2	a-3	b-1	b-2	c-1	c-2
a. Sense of Coherence	3.95	0.79	.73	1-7	—							
a-1. 把握可能感	3.74	0.92	.58	1-7	.71***	—						
a-2. 処理可能感	3.69	0.90	.34	1-7	.86***	.36**	—					
a-3. 有意味感	4.47	0.92	.46	1-7	.85***	.43***	.66***	—				
b. 自発的自己観												
b-1. 20答法の反応数	13.33	5.20	—	0-20	-.14	-.19	-.06	-.11	—			
b-2. 好ましさの評定値	3.41	0.73	—	1-5	.38**	.38**	.31**	.23*	.04	—		
c. 自発的世界観												
c-1. 20答法の反応数	9.21	5.08	—	0-20	-.02	-.02	-.02	-.01	.64	.04	—	
c-2. 好ましさの評定値	3.27	0.91	—	1-5	.31**	.30**	.19	.27*	-.07	.26*	.07	—

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$.

(2) コーディング・ルールの策定とコーディングの手順

コーディング・ルールの策定にあたっては、一部にフリーソフトウェアKH Coder（樋口 2014）を使用した。コーディング・ルールの策定には樋口（2014）および田附（2015）を参考に行った。なお、コーディング・ルールの策定とコーディングの手順は自己に関する20答法においても、世界に関する20答法においても同一の手続きをとった。

語の抽出と仮コーディング・ルールの作成 20答法の各反応について、誤字脱字を訂正したのち、KH Coderによる形態素解析（機械的に文章を区切ったうえで語を抽出し、抽出された語の品詞を判別する分析）を行った。その後、抽出された頻出上位150語を対象に、KJ法による仮のコーディング・ルールの生成を行った。この段階では、KH Coderによって抽出された単語レベルの意味を中心に分類を行った。

コーディング・ルールの修正 20答法のデータについて、仮コードに基づくコーディングを行った。田附（2015）では出現した単語にコードを付与していたが、20答法で表現されるテキストは基本的に前後の繋がりのない、1文で完結している文章であるため、本研究では、20答法の1回答（1文）に対してコードを付与した。この段階で、仮のコーディング・ルールがデータに即しているか、より適切で包括的なコーディング・ルールになっているかを協議し、コーディング・ルールの修正を行った。コーディング・ルールの修正は、田辺・正保（1997）の回答分類カテゴリをベースとし、田附（2015）のコーディング・ルールと本研究の仮のコーディング・ルールを照らし合わせ、包括的になるように行われた。コーディング・ルールの生成と修正は、第一筆者と第二筆者によって行われた。コーディング・ルールの修正は3度行われ、最終的に自発的自己観に関するコーディング・ルールは表2、自発的世界観に関するコーディング・ルールは表3のようになった。本コーディング・ルールの特徴として、主分類と副分類の設定がある。主分類は、コーディング対象となる記述（ひとつの20答法の反応）に1つのみ付与されるコードである。副分類は、コーディング

対象となる記述に、該当する場合にのみ副次的に付与されるコードであり、付与されない場合もあれば、複数付与される場合もある。これにより、1つの回答が示す主題（主分類）を明確にしつつ、その文章の含んでいるニュアンス（副分類）を表現できるようになった。

また、反応がもつ好ましさを判断するため、それぞれの記述にネガティブ・ニュートラル・ポジティブのラベルが付与された。このラベルは、20答法の回答者の評定得点に従い、「1.非常に好ましくない」、「2.好ましくない」をネガティブ、「3.どちらともいえない」をニュートラル、「4.好ましい」、「5.非常に好ましい」をポジティブとし、あくまで回答者本人がどう捉えているかを問題とした。

再コーディング 表2、表3に示されたコーディング・ルールに従い、再コーディングを行った。再コーディングにあたっては、自発的自己観は総反応数1,269件のうち400件まで、自発的世界観は総反応数764件のうち250件まで協議しつつコーディングを行い、その後は第一筆者と第二筆者が各々コーディングを行った。各自でのコーディングが終了した後、各々コーディングを行った部分について一致率を算出した。その結果、自発的自己観については89.6%、自発的世界観については86.6%と高い一致率を示した。コーディングが一致しなかった部分については、一件ずつ協議し、コードを決定した。その後、約1年が経過した時点で、各回答に関するコーディングの適切さの再評定を行った。再評定にあたっては、第一筆者と第二筆者が各々で改めてコード表に基づいてコーディング結果を見直し、各反応に付与されているコードの適切さに疑義が生じたもの、より適切なコードへの修正が提案されるものを持ち寄った。その後、再評定の結果が一致している部分に関してはそれを反映し、再評定の結果に差異が生じた部分は一件ずつ協議し、コードを確定した。

表2 自己に関する20答法のカテゴリ・コードとコーディング・ルール

カテゴリ・コード	コーディング・ルール	記述例	
主 分 類	家族	同居している人、動物、別居している血縁者。	4人家族だ。兄がいる。兄弟がいない。
	属性	性別、年齢、所属などの本人を表す社会的特性。	日本人だ。〇〇出身だ。大学生だ。
	身体	身体的な特徴への言及。	背が小さい。目が悪い。太っている。
	性格	本人を表す性格傾向。	面倒くさがり。優しい。マイペース。
	能力	本人が持つ特定の能力や、その獲得に関わるもの。	要領が悪い。計算が得意。運動神経が良い。
	生活	本人が日々の生活で営んでいること。喜怒哀楽を含む。	よく食べる。昼寝をする。実家から通っている。
	活動	本人が取り組んでいる特定のこと。	アルバイトをしている。就活をする。
	対象物・嗜好	本人が関心を向ける物事。	英語が好き。字を書くのが好き。納豆が嫌い。
	人間関係	本人が持っている他者や他者との関わり、またはその評価、人間関係に関する本人の性格。	友達が少ない。相談を受けることが多い。仲間とわいわいするのが好き。
	奇矯反応	奇矯反応、過剰に装飾的・比喩的・抽象的・自明な表現。	私だ。神だ。マトリョーシカだ。
現在の状態	回答中の本人の状態。	疲れている。眠い。困っている。	
分類不能	分類不能。過去形表現。	ドアを開ける。矛盾。髪を切った。	
副 分 類	願望・意志表示	積極的・主体的な欲求・意志の表明、自己の変化への志向性と主体的な対象への関与の意志。	～が欲しい。～したい。～を目指している。
	義務感	消極的・義務的な欲求・意志の表明。	～しなければならない。
	内省・自己開示	内省的自己開示、自らの内的世界や心情の自己開示。	自分がどんな人かわからない。やれと言われるとやる気を失う。
	肯定的表現	本人にまつわるものに関する肯定的評価を含む表現。	～が好き。～が良い。～ができる。
否定的表現	本人にまつわるものに関する否定的評価を含む表現。	～が嫌い。～が下手だ。～が苦手だ。	

表3 世界に関する20答法のカテゴリ・コードとコーディング・ルール

カテゴリ・コード	コーディング・ルール	記述例	
主 分 類	主観的特徴	世界が持っている物理的な特徴に対する主観的な捉え。	大きい、広い、丸い。
	自然	世界には自然物があることを表すもの。	緑が少ない、自然であふれている、綺麗な自然がたくさんある。
	多様性・謎	世界には多様なものごとや理解できないものごとがあることを示すもの。	一人一人違う、様々な一面を持っている、不思議である。
	抽象的概念・比喩	抽象的な概念や表現、比喩表現によるもの。	進化するものだ、時間的存在だ、人間のような。
	肯定的形容	一般的に肯定的と捉えられる形容表現。	美しい、明るい、温かい。
	否定的形容	一般的に否定的と捉えられる形容表現。	残酷だ、暗い、怖い。
	平等性・公平性	平等性、公平性に関わるもの。	不平等だ、不公平だ、勝ち組のためにある。
	戦争・平和	戦争や平和に関わるもの。	平和だ、平和に見えて平和ではない、戦争がある。
	文化・文明	文化や文明など、人間が作り上げてきたもの。	グローバル化している、長い歴史がある、人権が存在している、お金でうごいている。
	死生	世界には生や死、はじまりや終わりがあることを表すもの。	死なない、終わる。
	生活	世界は本人の生きている生活範囲内であることを表すもの。	便利だ、日本、1人暮らしだ。
	競争	世界には競争があることを表すもの。	競争的だ、待ってこない。
	人間主体	世界の主体は人間の捉えや人間関係であることを表すもの。	自分で作り出していくものだ、自分が主人公だ、人工的だ。
副 分 類	拒絶	世界を拒絶しているか、あるいは、世界に拒絶されると感じるかを表すもの。	自分のことを認めてくれない、自分を受け入れてくれない、自分を必要としていない。
	受容	世界を受容しているか、あるいは、世界に受容されると感じるかを表すもの。	愛に包まれている、生きていたいと思える場所である、時に自分の味方になってくれる。
	分類不能	分類不能、過去形表現。	よかった、荒々しかった、みんな笑っていた。
	願望・意志表示	積極的・主体的な欲求・意志の表明、世界の変化への志向性と世界への対象への関与の意志。	～がいい、～ほしい。
	義務感	義務的な欲求・意志の表明。	～であるべきだ。
類	肯定的表現	世界にまつわるものに関する肯定的評価を含む表現。	～だから好き、～だから良い。
	否定的表現	世界にまつわるものに関する否定的評価を含む表現。	～だから嫌い、～だからダメだ。

(3) 20答法の各カテゴリ・コードの反応数を説明変数、SOCを目的変数とした重回帰分析

自発的自己観、自発的世界観の各カテゴリ・コード別に、ネガティブ、ニュートラル、ポジティブのそれぞれの反応の出現数を説明変数、SOCを目的変数とした重回帰分析を行った。20答法の反応の出現数は、個人の20答法の反応に該当するカテゴリ・コードが含まれない場合は0、1つ含まれる場合は1、2つ含まれる場合は2……として個人毎にカウントした。各カテゴリ・コードの出現数は正規分布を大きく逸脱したカウントデータとなるため、重回帰分析の推定法は豊田(2014:208頁)に従い、対角重み付け最小二乗法(DWLS)を使用した。分析の結果、 $p < .05$ を示すか、 $\beta \geq |.30|$ の値を示した結果について、自発的自己観の結果は表4に、自発的世界観の結果は表5に示す⁽²⁾。

自発的自己観の結果については、副分類としてコードを付与した「肯定的表現」、「否定的表現」からの影響を受けている可能性が考えられたため、「肯定的表現」、「否定的表現」の値を統制した場合の β も表中に記載した。その結果、主分類に分類されたカテゴリ・コードからSOCへの効果は全て有意ではなくなり、 β の値も $\beta \geq |.30|$ を示したものはなくなった。副分類については、「否定的表現」はSOC全体、「把握可能感」、「有意味感」に有意な負の効果を有していた。また、ポジティブに評価された「肯定的表現」はSOC全体、「把握可能感」、「処理可能感」に有意な正の効果を有していた。加えて、統計的に有意ではないものの、

$\beta \geq |.30|$ の値を示したものとして、ネガティブに評価された「内省・自己開示」がSOC全体、「把握可能感」, 「処理可能感」に対して与える効果, および「否定的表現」が「処理可能感」に与える効果が確認された。

自発的世界観の結果については、副分類としてコードを付与した反応自体がほとんどなかったため、主分類も副分類も同様に扱った。その結果、主にポジティブに評価された「主観的特徴」はSOC全体, 「処理可能感」に有意な正の効果をもっていた。次に、主にネガティブに評価された「戦争・平和」はSOC全体と「処理可能感」, 「有意味感」に正の効果をもっていた。加えて、統計的に有意ではないものの、 $\beta \geq |.30|$ 以上の値を示したものとして、ニュートラルに評価された「生活」が「有意味感」に対して与える効果, およびネガティブに評価された「拒絶」がSOC全体と全ての下位尺度に負の効果を与えることが確認された。

表4 自己に関する20答法における重回帰分析の標準偏回帰係数（推定法：DWLS）

カテゴリ・コード	反応数	回答者数	β				β (肯定的表現・否定的表現を統制)				
			SOC全体	把握可能感	処理可能感	有意味感	SOC全体	把握可能感	処理可能感	有意味感	
属性	N	10	9	.05	.05	.03	.04	.02	.01	.01	.02
	0	38	22	.06	.08	.18	-.10	.08	.09	.20	-.08
	P	58	29	.11	.18	.05	.02	.00	.08	-.04	-.06
				R^2	.02	.05	.04	.01			
	全体	106	45	.14	.21*	.16	-.03	.06	.13	.09	-.09
			R^2	.02	.04	.02	.00				
対象物・嗜好	N	16	14	-.08	-.10	.01	-.08	.00	-.03	.07	-.03
	0	26	20	.07	.12	.02	.03	.14	.18	.07	.08
	P	165	60	.16	.20*	.13	.04	.12	.17	.10	.00
				R^2	.03	.06	.02	.01			
	全体	207	69	.15	.20*	.13	.02	.15	.19	.15	.01
			R^2	.02	.04	.02	.00				
人間関係	N	54	31	-.42*	-.42**	-.33*	-.27	-.22	-.25	-.18	-.10
	0	14	12	-.10	-.04	-.04	-.18	-.08	-.02	-.03	-.16
	P	54	35	.00	.01	-.09	.06	.00	.00	-.09	.09
				R^2	.19	.18	.13	.11			
	全体	122	60	-.34*	-.32*	-.32*	-.21	-.17	-.17	-.19	-.07
			R^2	.12	.10	.10	.05				
内省・自己開示	N	43	22	-.43	-.40	-.28	-.35				
	0	14	11	.03	.05	-.05	.07				
	P	21	17	.10	.05	.10	.10				
				R^2	.16	.15	.08	.11			
	全体	78	36	-.16	-.16	-.13	-.09				
			R^2	.03	.03	.02	.01				
肯定的表現	N	6	6	-.08	-.15	.00	-.02				
	0	27	17	-.03	.05	-.10	-.05				
	P	239	70	.23*	.24*	.21*	.11				
				R^2	.05	.08	.05	.01			
	全体	272	74	.19*	.23*	.15	.08				
			R^2	.04	.05	.02	.01				
否定的表現	N	125	57	-.50	-.48	-.34	-.38				
	0	22	16	-.10	-.02	-.10	-.15				
	P	31	19	-.12	-.03	-.20	-.08				
				R^2	.26	.23	.16	.16			
	全体	178	71	-.50*	-.44*	-.40	-.40*				
			R^2	.25	.19	.16	.16				

注) Nはネガティブ, 0はニュートラル, Pはポジティブを表す。SOCはSense of Coherenceの略である。

肯定的表現・否定的表現を統制したモデルの R^2 は肯定的表現・否定的表現の効果も含まれるため、記載していない。
** $p > .01$, * $p > .05$.

表5 世界に関する20答法における重回帰分析の標準偏回帰係数(推定法:DWLS)

カテゴリ・コード	反応数	回答者数	β				
			SOC全体	把握可能感	処理可能感	有意味感	
主観的特徴	N	9	.09	.13	.14	-.06	
	0	29	.33	.33	.25	.22	
	P	64	.25*	.32*	.10	.17	
			R^2	.14	.17	.07	.07
	全体	102	60	.34**	.40**	.20	.21
			R^2	.12	.16	.04	.04
戦争・平和	N	20	.31*	.27	.25*	.23*	
	0	4	.15	.16	.16	.03	
	P	18	.10	.09	.10	.05	
			R^2	.11	.09	.09	.05
	全体	42	35	.30*	.27*	.27*	.20
			R^2	.09	.07	.07	.04
生活	N	5	.11	.14	.08	.03	
	0	3	.19	.14	.35	-.02	
	P	5	-.07	-.11	-.04	-.01	
			R^2	.04	.04	.12	.00
	全体	13	8	-.11	.11	.21	.01
			R^2	.02	.01	.05	.00
拒絶	N	16	-.46	-.40	-.43	-.31	
	0	3	.12	.20	.08	-.01	
	P	5	-.03	.02	-.12	.01	
			R^2	.18	.13	.17	.10
	全体	24	16	-.36	-.24	-.24	-.28
			R^2	.13	.06	.15	.08

注) Nはネガティブ, 0はニュートラル, Pはポジティブを表す。

SOCはSense of Coherenceの略である。

** $p > .01$, * $p > .05$.

(4) 自発的自己観・自発的世界観の好ましさを説明変数, SOCを目的変数とした重回帰分析(交互作用の検討)

仮説2を検証するため, 自発的自己観の好ましさ, 自発的世界観の好ましさ, 及び, それらの交互作用項を説明変数, SOCを目的変数とした階層的重回帰分析を行った。推定方法は最尤法を使用した。その結果, SOC全体と全ての下位尺度において, 自発的自己観の好ましさ・自発的世界観の好ましさの交互作用が有意となった(表6)。交互作用の方向性を確認するために, SOC全体と各下位尺度に対する結果について, 自発的自己観の好ましさを予測変数, 自発的世界観の好ましさを調整変数, SOCを目的変数とした単純傾斜分析を行った。SOC全体についての結果のプロットは図1に, 「把握可能感」についての結果のプロットは図2に, 「処理可能感」についての結果のプロットは図3に, 「有意味感」についての結果のプロットは図4に示す。単純傾斜分析の結果, SOC全体, 「把握可能感」, 「処理可能感」, 「有意味感」のいずれの場合においても, 自発的世界観が低い場合(-1SD)に単純傾斜が有意となった($p < .001$)。そのため, 自発的自己観の好ましさと自発的世界観の好ましさはSOCに対して交互作用を有するという仮説2は支持された。

表6 SOCに対する自発的自己観の好ましき・自発的世界観の好ましきの交互作用の検討

	SOC全体		把握可能感		処理可能感		有意味感	
	Model 1	Model 2						
Model 1								
自発的自己観	.32**	.31**	.28*	.27*	.17	.17*	.32**	.31**
自発的世界観	.22*	.14	.11	.05	.21	.13	.23*	.18
Model 2								
自発的自己観 × 自発的世界観		-.29***		-.23*		-.28**		-.18*
R^2	.19	.30	.11	.18	.09	.20	.20	.24
ΔR^2		.11***		.07**		.11**		.04*

*** $p > .001$, ** $p > .01$, * $p > .05$.

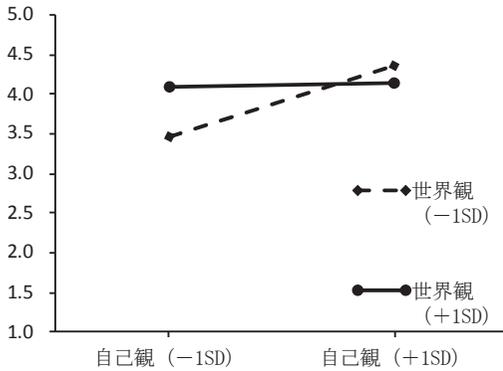


図1 SOC全体に対する交互作用の検討

自己観は自発的自己観の好ましきを表し、
世界観は自発的世界観の好ましきを表す。

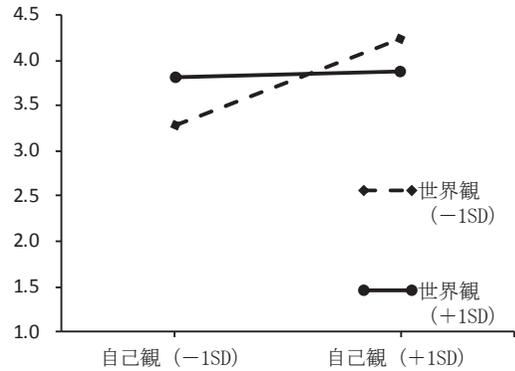


図2 把握可能感に対する交互作用の検討

自己観は自発的自己観の好ましきを表し、
世界観は自発的世界観の好ましきを表す。

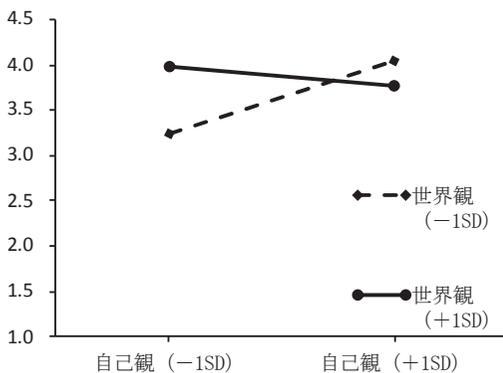


図3 処理可能感に対する交互作用の検討

自己観は自発的自己観の好ましきを表し、
世界観は自発的世界観の好ましきを表す。

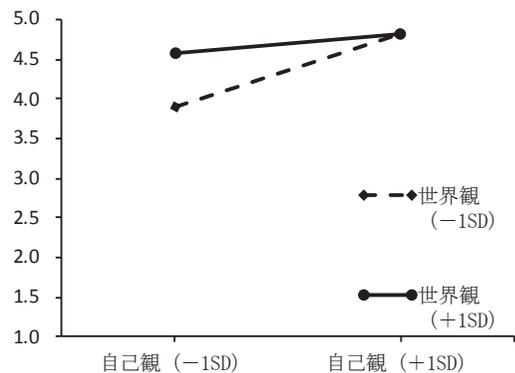


図4 有意味感に対する交互作用の検討

自己観は自発的自己観の好ましきを表し、
世界観は自発的世界観の好ましきを表す。

4. 考察

本研究の目的は、20答法の反応を分析し、SOCに影響を与える自発的自己観・自発的世界観について探索的に検討することによって、SOC涵養のための知見を得ることであった。また、自発的世界観の好ましさとSOCの間には正の相関があること、自発的自己観の好ましさと自発的世界観の好ましさはSOCに対して交互作用を有していることを検証することであった。

(1) SOCに影響を与える自発的自己観・自発的世界観の探索的検討

どのようなカテゴリに属する反応が多い場合、SOCに効果を有するのかを重回帰分析により検討した。その結果として、自発的自己観については、主分類に属するカテゴリの効果は、それに付随する副分類の「肯定的表現」・「否定的表現」の効果に併呑される可能性が示唆された。また、自発的世界観については、SOCに効果を有する反応カテゴリが複数ある可能性が示唆された。以下、それぞれについて考察する。

自発的自己観がSOCに与える効果について、ネガティブな「内省・自己開示」はSOCに対して有意ではないものの、SOC全体、「把握可能感」、「有意味感」に対して $\beta \geq |.30|$ の効果を有していた。自己についてのネガティブな「内省・自己開示」の反応内容からは、自己の負の側面を明確に捉えていることが窺われ、ネガティブな自己観の中核になっていると思われるものが多く含まれていた。ネガティブな「内省・自己開示」を行う者は何らかの課題を抱えており、それがストレスサーとしてSOCに影響を与えた可能性がある。個人が抱える課題を解決、解消できるような働きかけが必要であろう。

「否定的表現」については、SOC全体、「把握可能感」、「有意味感」に対して有意な負の効果を示しており、その標準偏回帰係数は、 $\beta = -.40$ を下回っていた。「処理可能感」についても、有意ではないものの $\beta = -.34$ であり、同様の傾向を示していた。「否定的表現」は、「～が嫌い、～が下手だ、～が苦手だ」といったような、自己の各側面を否定的に把握していることを示すものであり、「否定的表現」を用いて自己を表現する者のSOCは低くなることが示唆された。逆に、「肯定的表現」、特にポジティブな「肯定的表現」はSOC全体、「把握可能感」、「処理可能感」に有意な正の効果を示していた。「肯定的表現」は、「～が好き、～が良い、～が得意だ」といったような、自己の各側面を肯定的に把握していることを示すものであり、「肯定的表現」を用いて自己を表現する者は、「有意味感」を除いたSOCが高くなることが示唆された。これらのことから、SOCを涵養するためには、自己について「肯定的表現」を用いて把握できるよう働きかけることが重要であり、自己を「否定的表現」を用いて把握することを避けるような働きかけが重要であると考えられる。自己を含む物事に対して否定的表現を多用する者には、否定的な表現を肯定的な側面から捉え直せるようリフレーミングすることが有効であると考えられる。

自発的世界観のうち、SOCに対して効果を有していたカテゴリについて、「主観的特徴」、「戦争・平和」には有意な効果を有するものが含まれており、「生活」、「拒絶」には有意ではないもの $\beta \geq |.30|$ の効果を示すものが含まれていた。まず、ポジティブな「主観的特徴」は、SOC全体と「把握可能感」に対して有意な正の効果を有していた。「主観的特徴」についての反応は、「大きい、狭い、広い、丸い」といったものが代表的であり、世界が概括的にどのようなものを把握している、という感覚が、「把握可能感」を導いているのかも知れない。ただし、より詳細に世界を捉えていると考えられる「抽象的概念・比喩」や「肯定的形容」、「否定的形容」はSOCに対して有意な効果を有してはいなかった。何故「主観的特徴」がSOC全体や把握可能感を高めるのかについては、今後の検討が必要である。

次に、ネガティブな「戦争・平和」はSOC全体、「処理可能感」、「有意味感」に有意な正の効果を有して

おり、「戦争・平和」全体はSOC全体、「把握可能感」、「処理可能感」に有意な正の効果をもっていた。ネガティブな「戦争・平和」は主に世界には戦争があることや、平和ではないことを表す反応であった。「戦争・平和」全体が「把握可能感」に効果をもっていることは、回答者が有する全体を俯瞰してみることができる、という特徴を反映している可能性がある。一方で、ネガティブな「戦争・平和」、「戦争・平和」全体が「処理可能感」に対して効果をもつのは、平和を享受している自分を自覚し、戦争状態にあることと比べれば、自分は何んとかやっていると、という感覚を誘発しているためかも知れない。また、ネガティブな「戦争・平和」が「有意味感」に対して効果をもっているのは、世界には戦争があるが、一方で自らは平和を享受できている、という自覚を引き起こし、自分の生に対する前向きな姿勢を喚起するためではないだろうか。

次に、ニュートラルな「生活」は、有意ではないものの「処理可能感」に $\beta=0.35$ の効果をもっていた。しかしながら、ニュートラルな「生活」の反応数は3件かつ、回答者は3名のみであり、 $p=0.32$ であったため、「処理可能感」が高い者が偶然ニュートラルな「生活」の反応をした可能性が高い。

最後に、ネガティブな「拒絶」は、有意ではないもののSOC全体と全ての下位尺度に対して $\beta \geq |0.30|$ の効果をもっていた。ネガティブな「拒絶」は、表3に例示した「自分のことを認めてくれない。自分を受け入れてくれない。自分を必要としていない。」に加え、「思い通りにいかない。やりたいことができない。どうでもいい。」といったような反応があり、SOCの全ての要素に対して真逆の要素を示す反応となっていた。一方で、「拒絶」の対照となる「受容」については、SOCに対して有意な効果は有しておらず、標準偏回帰係数も最大で $\beta=0.16$ と小さい値であった。世界から拒絶されている、という認識に至るには、様々な場面で疎外を経験している可能性、世界のポジティブな側面について認知しようとしていない可能性が高いと考えられる。自発的自己観における「否定的表現」と同様、世界観に対するリフレーミングが有効である可能性があるものの、感じている拒絶の程度によっては、専門家による支援が必要であると考えられる。

(2) SOCは世界を信頼している自己を想定しているという仮説の検証

表1の結果から、SOCは自発的世界観の好ましさと有意な正の相関をもっていることが確認された。また、表6の結果から、自発的自己観の好ましさと自発的世界観の好ましさはSOC全体、「把握可能感」、「処理可能感」、「有意味感」のいずれに対しても交互作用をもっていることが確認された。ただし、単純傾斜分析の結果のプロットからは、一部本研究の仮説通りとはならなかった。本研究の仮説では、自発的自己観の好ましさと自発的世界観の好ましきの両方が好ましい者のSOCが最も高くなり、いずれか一方が好ましく、いずれか一方が好ましくない者のSOCは中程度であり、両方が好ましくない者のSOCは最も低くなると想定されていた。しかしながら、単純傾斜分析の結果は、自発的自己観が好ましく、自発的世界観が好ましくない者のSOCが最も高くなる傾向にあった。

仮説は、SOCは世界と対立する自己ではなく、世界を信頼している自己を想定し、自尊心や自己効力感のように、世界と対峙する自己を想定する文化の価値観に依拠しておらず、世界を信頼している自己によっても高められる(山崎 2011, 8頁)という点に依拠していた。本研究の結果は概ねその想定を支持する結果であった。しかしながら、本研究の結果の一部からは、その想定に疑義が呈されることにもなった。本研究の結果からは、自発的自己観が好ましく、自発的世界観が好ましくない、すなわち自己が世界と対峙している場合のSOC(特に「把握可能感」と「処理可能感」)が最も高くなる傾向にあった。これは、SOCが世界と対峙する自己を想定する文化の価値観に依拠している可能性を示唆するものである。これを補足するデータとして、SOCと相互独立の-相互協調的自発的自己観の関係を検討した磯和・三宮(2017)では、相互独立の自発的自己観はSOCに対して有意な正の相関をもつ、相互協調的自発的自己観はSOCに対して有意な負の相関をもつこと

が示されている。本研究の結果では、SOCと自発的世界観の好ましさととの間に正の相関を確認し、自発的自己観の好ましさと自発的世界観の好ましさがSOCに対して交互作用を有することを確認したが、本研究は日本在住の大学生を対象としているため、これらの結果が見られた可能性がある。つまり、日本と異なる文化の人々を対象とした場合、SOCと自発的世界観との間に見られた正の相関が消失したり、負の相関が見出される可能性や、自発的自己観の好ましさと自発的世界観の好ましさをSOCに対する交互作用が消失したり、方向性が逆になる可能性がある。

(3) 本邦においてSOCを涵養するためのアプローチ

本研究の結果から得られる本邦においてSOCを涵養するための示唆としては、自発的自己観の好ましさのみではなく、自発的世界観の好ましさを高めることによっても、SOCを高めうる、ということである。どちらか一方の好ましさが低い場合、低い方の好ましさを高めるようにアプローチするよりも、比較的高い、もしくは本人が受け入れやすい方のどちらか一方の好ましさをより高めるようなアプローチが有効であると考えられる。

自発的自己観にアプローチする場合は、できるだけ肯定的な表現を用いて自己や物事を表現するように促し、否定的な表現を多用する者に対しては、肯定的な捉え方ができるようにリフレーミングを行うことが有効である可能性がある。また、自己に対するネガティブな内省をする者に対してや、そのことを自己開示された場合、問題解決的に働きかけることも有効であろう。自発的世界観についても、自発的自己観と同様にネガティブな捉えのリフレーミングが有効であると考えられる。それに加えて、概括的に世界を把握できていると捉えられるような働きかけや、戦争と平和に関する教育はSOC（特に「把握可能感」）を高める可能性があると考えられる。

(4) 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点として、対象の限定性と分析対象者数の少なさが挙げられる。本調査の対象者は地方私立A外国語大学の学生のみが対象であり、また、調査対象者183名のうち、最終的に分析対象となったものは80~93名と、半数以上の者が何らかの理由で分析対象から外れている。そのため、分析対象者の母数が少なく、20答法の各カテゴリの反応数や回答者数がかなり少なくなっている。これによって、本研究の結果には何らかのバイアスが生じている可能性が否定できない。また、本研究では20答法を用いて自発的自己観、自発的世界観の順に測定を行ったが、先の20答法の結果が後の20答法の結果に何らかの影響を及ぼしている可能性がある。本研究の結果の解釈には慎重になり、追試が必要だろう。またその際には、対象範囲を広げること、特に日本と異なる文化に属する者を対象とすることや、20答法の順序についてカウンターバランスをとることが必要と考えられる。

<注>

- (1) 93名の基礎統計量、82名の基礎統計量は第1筆者のWebページで公開している。
<https://isowa-s.com/achievement/P201801/appendix.html>
- (2) 反応をポジティブ、ニュートラル、ネガティブに分けた場合の度数及び回答者数と、有意でなかったカテゴリの重回帰分析の結果は、注(1)と同じ第1筆者のWebページで公開している。

付記

本研究の調査にご協力いただきました研究協力者の方々、および、調査用紙の配布にご協力くださいました京

都外国語大学の梅本貴豊先生に御礼申し上げます。本研究は、磯和・野口・三宮（2016）「大学生の自己観・世界観と首尾一貫感覚との関連—20答法を用いた自己観・世界観の測定—」に対して再分析・修正をしたものである。また、本研究は、磯和（2016；印刷中）と同じ調査のデータを、質的分析の観点から再分析したものである。

【引用文献】

- Antonovsky, A. 1987. 山崎喜比古・吉井清子監訳『健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム—』有信堂高文社 2001.
- 江見佳俊・山田ゆかり 1986 「深層の機能的モデル構成のための基礎的研究—20答法における精神病患者の自己記述について(1)—」, 『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』, 2, 239-212頁.
- Eriksson, M., and Lindström, B. 2005 “Validity of Antonovsky’s sense of coherence scale: a systematic review.” *Journal of epidemiology and community health*, 59, pp.460-466.
- Eriksson, M., and Lindström, B. 2006 “Antonovsky’s sense of coherence scale and the relation with health: a systematic review.” *Journal of Epidemiology and Community Health*, 60, pp.376-381.
- Eriksson, M., and Lindström, B. 2007 “Antonovsky’s sense of coherence scale and its relation with quality of life: a systematic review.” *Journal of Epidemiology and Community Health*, 61, pp.938-944.
- 藤里紘子 2015 「Sense of Coherenceの3要素はあらゆる状況で適応的に働くのか？——Sense of Coherenceへの介入研究に向けて——」, 『応用心理学研究』, 41, 147-155頁.
- 樋口耕一 2014 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版.
- Kuhn, M. H., and McPartland, T. S. 1954 “An empirical investigation of self-attitudes.” *American Sociological Review*, 19, pp.68-76.
- McGuire, W. J., McGuire, C. V., and Winton, W. 1979 “Effects of household sex composition on the salience of one’s gender in the spontaneous self-concept.” *Journal of Experimental Social Psychology*, 15, pp.77-90.
- Idan, O., Eriksson, M., and Al-Yagon, M. 2017 “The salutogenic model: the role of generalized resistance resources.”, in *The Handbook of Salutogenesis*, Springer, Cham, pp. 57-69.
- 磯和壮太郎・野口直樹・三宮真智子 2016 「大学生の自己観・世界観と首尾一貫感覚との関連—20答法を用いた自己観・世界観の測定—」, 『日本パーソナリティ心理学会第25回大会発表論文集』, 27頁.
- 磯和壮太郎・野口直樹・三宮真智子 印刷中 「大学生のSense of Coherenceが抑うつと主観的幸福感に及ぼす影響に対する自発的な自己観の好ましきによる媒介効果の検討」, 『Journal of Health Psychology Research』, 31, 頁未定.
- 磯和壮太郎・三宮真智子 2017 「大学生のSense of Coherenceと自己観との関連 —相互独立的-協調的自己観と恩恵享受的自己観を取り上げて—」, 『日本パーソナリティ心理学会第26回大会発表論文集』, 92頁.
- 田附紘平 2015 「アタッチメントスタイルと自己イメージの関連」, 『パーソナリティ研究』, 23, 180-192頁.
- 田辺肇・正保春彦 1997 「TST (20答法) による自己観の把握—反応分類手続きの作成と自己評価との関連による妥当性検討—」, 『教育相談研究』, 35, 57-66頁.
- 戸ヶ里泰典・山崎喜比古・中山和弘・横山由香里・米倉佑貴・竹内朋子 2015 「13項目7件法sense of coherenceスケール日本語版の基準値の算出」, 『日本公衆衛生雑誌』, 62, 232-237頁.
- 戸ヶ里泰典 2008 「SOCと健康」山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子編『ストレス対処能力SOC』有信堂高文社, 69-90頁.
- 戸ヶ里泰典 2014 「健康生成論およびsense of coherenceに関する研究の動向と今後の課題」, 『日本健康教育学会誌』, 22, 69-75頁.
- 戸ヶ里泰典 2017 「応用への道と残された課題」山崎喜比古（監修）戸ヶ里泰典（編）『健康生成力SOCと人生・社会—全国代表サンプル調査と分析—』有信堂高文社, 201-219頁.
- 豊田秀樹 2014 『共分散構造分析 [R編] —構造方程式モデリング—』, 東京図書.
- 山崎喜比古 2008 「ストレス対処能力SOCとは」山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子編『ストレス対処能力SOC』有信堂高文社, 3-24頁.
- 山崎喜比古 2011 「ストレス対処力SOCとは」山崎喜比古・戸ヶ里泰典編『思春期のストレス対処力SOC—親子・追跡調査と提言—』有信堂高文社, 3-19頁.

Relationship Between Sense of Coherence, Spontaneous Self-Concept, and Spontaneous World-Concept.

ISOWA Soutarou, NOGUCHI Naoki, and SANNOMIYA Machiko

The purpose of this research was to obtain knowledge on training the Sense of Coherence (SOC) using exploratory examinations of the influences of spontaneous self-concept and spontaneous world-concept on SOC based on analysis of the Twenty Statement Test for university students. As a result, from the viewpoint of spontaneous self-concept, a highly preferred description using “positive expression (~ so like, good)” had a positive effect on SOC, and a less preferred description using “negative expression (~ not like, bad)” showed a negative effect on SOC. From the spontaneous world-concept, “subjective features (large, narrow, wide, round)” had a positive effect on total SOC and on Comprehensibility, which is one of the sub-factors of SOC, and the less preferred description using “war / peace (war, there is peace)” showed a positive effect on total SOC and on manageability and meaningfulness, which are sub-factors of SOC. Also, from the examinations of the correlation between spontaneous world-concept and SOC, it was shown that there was a positive correlation. Furthermore, from examining the interaction between spontaneous self-concept and spontaneous world-concept on SOC, those with less preferred spontaneous self-views and highly preferred spontaneous world-concepts had the lowest SOC. Additionally, those with highly preferred spontaneous self-concepts and less preferred spontaneous world-concepts had the highest SOC. From these results, we discussed the approach towards training the SOC.